



小関藤一郎教授

小関藤一郎教授記念号によせて

社会学部長 倉田和四生

昭和35年5月、関西学院大学社会学部の発足とともに就任されて満20年間、教鞭を取って来られた小関藤一郎先生がこの3月末で定年退職されることになりました。

先生は昭和9年、東京大学文学部社会学科を卒業されたあとも暫く同大学院で研鑽をつまれましたが、戦争中は外地で御苦労されたあと、昭和22年から三重県の社会教育課長をつとめられました。その後、昭和25年から三重県立大学講師になられ、南山大学教授を経て昭和35年5月から新設された関西学院大学社会学部に赴任されたものであります。

したがって先生は社会学部づくりの苦勞を味わいながら学部の基礎をつくって来られた創設者の1人であります。そしてその後、20年間、学部とともに歩みつけて来られたわけではありますが、ことに昭和45年4月から47年3月までの2ケ年間、社会学部長としての重責を担われました事実はここに明記しておくべきことと思います。45年4月といえますと学院始まって以来の大紛争の余燼がまだ十分に収まっておらず、いろいろな形でくすぶり続けていた時期でありました。次々に生まれて来る困難な問題と取組みながら紛争の余燼を收拾し、学部の教学と研究体制を再建するために責任者としてどれだけ御苦労なされたか想像にあまりあるものがあります。

さらに先生は学部長の任を終えると、ひきつづいて図書館長の職につき、4年間に図書館の近代化につくされました。もともと語学に堪能な先生は学問的な文献やデータに精通しているところから、いつの間にか、図書館長に最もふさわしい人物という評価が生まれたのも当然といえましょう。このこともまた忘れることの出来ない先生の業績といわなければなりません。

先生は社会学のなかでも特にフランス社会学、わけでもエミユール・デュルケームの研究者として広く知られておりますが、昭和52年には長年にわたるその研究成果を集大成して学位論文「デュルケームと近代社会」を社会学部に提出され、「社会学博士」の学位を授与されました。このことは学問研究を志す私達後輩にとって、なによりも強い励ましとなるものであります。

またフランス語に堪能な先生は前々から日本におけるフランス文化の紹介につとめておられましたが、その功績が認められ、51年パルム・アカデミクのオフィシエ章、52年オールド・ナショナル・ド・メリト・シュヴァリエ章をあいついで受章されました。

幸い先生は3月末で定年退職されました後も、非常勤講師として講義を担当していただくことになっております。御健康に恵まれ、永く社会学部のために御指導下さいますようお願いいたします。